

につけた夏服一つで大病にもならず親子四人無事引揚げて来た。爾来どんな困苦にもひるまず生き抜き日本人としての国民的義務を果たし一家を守り抜いてきた現状を省みるのである。

ふるさとへの道は遠かった

山形県 羽柴 芳太郎

百万戸移民、そして満州建国、五族共和、王道楽土の理想像に惚れ込んで大和民族永遠の繁栄と大日本帝国の隆昌をこいねがい不肖私も開拓地子弟の教育のためにと昭和十四年三月、拓務省第五次朝陽屯開拓団の学校教師として赴任しました。不便や苦勞は新開地の常と覚悟しての渡満だったので、現地生活は平和と満足感にあふれた毎日でした。しかし日米開戦となるや男子は次々に姿を消し召集され銃後の守りも大分苦しくなってきました。小学校の生徒さえも農作業に毎日狩りだされるありさまで、平和であるべき開拓地も次第に不安の度を増し

てきました。折りも折りソ連軍の越境侵入、不可侵条約の破棄で無血占領そのものだったのです。国境に点在する開拓日本人留守家族の驚きは言語に絶するものがありました。想像も及ばないありさまで、現地を避難することなり軽装夏服で我が家を飛び出しました。これが日本内地までの避難行になるうとは誰が予想したでありましょうか。昼夜の別なく食うや食わずの強行軍。泥水を飲んで空腹を凌ぎ、目の前にふくれあがった大きな土左衛門を見たときの驚きといったらこの世の出来事かと思えたので乳飲児は見る見るうちに細り次々に死んでいきました。他人の顔が驚くほど瘦せこけているのを見て驚くばかりでした。逃げゆく方向は誰も教えませんでした。羊の群れが先頭の一頭について移動する如く黙ってぞろぞろと死の行軍を当てもなく続けました。

終戦の年の八月十八日頃かと思う。路傍に一人の老人が腰を下ろして休んでいた。知人の父親であった。じいさん俺達は先に行っているから後でゆっくり来なさいと声をかけてその場を通りすぎた。翌日行く先々の危険を

心配して一行は昨日の道を逆戻りすることにした。暑い夏の太陽は容赦なく頭から照りつけていた。みんな汗だくの態だった。昼すぎ頃昨日のじいちゃんがまだ休んでいるのを発見した。よくみると横になって死んでいるではないか、目耳鼻口と所かまわず丸々と太った蛆が顔を所狭しと動き回っているのである。見るに見兼ねて野の花を手折り眼前に供え南無阿弥陀仏と唱えながら手を合わせた。あわれ七十近い老人との最後の別れであった。また、八月二十日頃の早朝かと思う。雨雲の低く垂れこめた日だった。涙と鼻水と一緒にして泣き叫びながら母親を探し求める女の子がいた。見れば知人の娘だ。母親はどうしたと尋ねたら側の人は言う。我が身が一番大事だから足手まといになるものは何でも捨てていこうと行って暗い中にこの子を置き去りにして東の方へ行つたとのこと。終戦後何年かが経ってからこの子は肉親探しのため日本へやってきた。父親はシベリアから帰ってきていたので奇しくも親子の対面再会の夢は叶えられた。母親はこのことを知ったのかどうかは知らないが、しかし生きて日本へ帰っていたとしてもこの娘に合わせる顔はな

い筈だ。福井県出身の親子のめぐり合わせである。私は新京で越冬し、勤労奉仕隊の中隊長等の仕事をし翌年内地送還の一行とともに帰国したが牡丹江裏の山中において妻子五人を見失った痛手は今も忘れることは出来ない。その後の風の便りみんな死に小高い山裾に葬られているという。

帰国後中学教師として定年までこの道一筋にと務めあげた。現在はボランティア的な仕事に毎日を忙しく動き回っている。

引揚げ者労苦の断片

山形県 鳥海 啓 雄

昭和十三年当時十八歳で満鉄社員に採用されて渡満した。十五年に現役で軍隊に三年余、十八年四月満期除隊し入船駅に復職した。二十年六月北鮮の羅津駅に転勤、その頃よりB29の飛来で港周辺の投爆があった。八月九日未明突然空襲警報発令、家の中も昼のように明るく、